

国際交流と英語教育

東京工業高等専門学校教授 村井 三千男

はじめに

様々な地域で、また様々な側面で、国際化が進んできているのは言うまでもありません。世界的レベルでも日本国内レベルでも、一般社会でも高等教育機関においても、国際化がますます進展しています。高専のみならず国内の多くの学校が国際交流に積極的に取り組み、各校の特色の一つとして重視しているのが現状です。ここでは全国高専の国際交流について概観し、勤務校である東京高専の国際交流とそれにかかわる英語教育について述べます。

全国高専における国際交流の現状

高専機構が発表した「平成十九年度学生海外研修等状況調査」(平成十九年五月一日現在)によれば、何らかの形で国際交流を実施している高専は全国国立五五高専中四七校に上ります。研修先となる国はアメリカ・カナダ・オーストラリアなどの英語圏もありますが、中国・韓国などのように母語が英語ではない国もあります。全体としては合計二七カ国で高専生が研修を行っています(本科学生一五七五人、専攻科生七十七人、合計一六五二人)。研修内容としては主に1. 語学研修、2. 勉学・研究、3. 異文化体験、4. 異文

化交流、5. 施設等見学、6. その他(海外インターンシップ等)がありますが、それらの総数は次のようになっています。

1. 三三三高専
2. 一八高専
3. 三五高専
4. 三四高専
5. 一九高専
6. 五高専

実施形態ですが、学生が単独に海外研修する場合もある一方、多数の学生が協力または近隣の数カ所で研修を受けるものもあります。以下は二〇人以上参加の海外研修です。

仙台電波高専二四人(タイ、福島高専二〇人(オーストラリア)、群馬高専六人(中国、富山商船高専三〇人(オーストラリア)、石川高専三九人(中国、豊田高専三七人(アメリカ)、鈴鹿高専二一人(韓国、舞鶴高専二九人(韓国)、四一人(タイ、二九人(台湾、四一人(中国、明石高専三八人(台湾、八〇人(マレーシア、シンガポール、和歌山高専四一人(台湾、呉高専八八人(アメリカ、三九人(台湾、三八人(韓国、徳山高専四〇人(フランス、新居浜高専三〇人(アメリカ、北九州高専二六人(シンガポール)、佐世保高専四一人(中国、熊本電波高専二一人(マレーシア、シンガポール、四〇人(韓国)、鹿児島高専三三人(カナダ、三七人(ドイツ)

海外研修には研修旅行あるいは修学旅行として三、四日間という短期間のものも含まれますが、一年〜二年間という長期の研修もあります。また海外インターンシップを実施している高専が現在はまだ少ないようですが、今後は急激に増加すること予想されます。なお、上記の資料は平成十九年度一年間に実施された海外研修について各高専からの回答を集計したものであり、必ずしもすべてを網

羅しているものではありません。例えば東京高専では日豪学生交流として二年毎にオーストラリアに学生を派遣していますが、その年度は豪学生受入の年のため学生派遣について報告していません。また全国高等専門学校英語教育学会(COCEIT)会員の先生方から新たな海外研修(あるいはその可能性)について情報を得ていますし、平成二十一年七月現在ではさらに増加していることと推測しています。

全国高専における留学生受入の現状

高専機構より平成二十年五月一日現在の「平成二十年度外国人留学生在籍一覧表」が公表され、平成二十一年六月二十、二十一両日に沖縄高専で開催された留学生・国際交流担当教員研究会でも引用されましたが、国立五五高専合計では次のような留学生在籍状況となっています。

国費留学生 アジア三カ国、 アフリカ八カ国、南米他四カ国	三三三人
マレーシア政府派遣留学生	二〇九人
私費留学生 アジア六カ国	一六人
合計	五三八人

高専別では、長岡高専二三人、小山高専二人、津山高専一七人、木更津高専一六人、東京高専一五人、福島高専・和歌山高専・新居浜高専一四人などになっており、平均して

一高専に一〇人近い留学生が在籍していることになりました。「留学生三〇万人計画」という政府の方針に基づき、高専としても今後留学生数を大幅に増加する方向で審議がなされています（前述の研究集会によれば、教育内容の充実と寮等の設備充実の理由などにより、高専留学は評価が高いとのことです）。

東京高専における国際交流の現状

東京高専では次の三種類の国際学生交流を実施しています。

- (1) 日豪学生交流 一九八四年に開始し、現在までに派遣は一二回、受入は一回実施しています。以前はMonash University Gippsland Campus、現在はCentral Gippsland Technical & Further Education, East Gippsland Technical & Further EducationのTAFE二校と学生間文化交流を行っています（双方向、二年一周期）。
 - (2) 日韓学生交流 一九八五年に開始し、派遣六回、受入四回。釜山情報大学と教員・学生間の学術・文化交流を行っています（双方向、二年一周期）。
 - (3) ヘルシンキ学生交流 二〇〇〇年に開始し、派遣三回、受入九回。Helsinki Metropolia University of Applied Sciences (Helsinki Polytechnicが合併により改称)と学生間交流を行っています（双方向、派遣隔年、受入毎年、派遣一カ月、受入三カ月）。
- なお、英語を十分に使用して交流することにより、(1)では一単位、(3)では二単位を学生が取得できます。全国高専の多くがそうだと思いますが、英語圏においても非英語圏においても、実際に英語を使用する場面が多くあります。そのような状況に身を置くことが学

生の英語に対するmotivationを高める上で非常に大きな意味を持つものと実感しています。実際に異文化理解をする上でも英語力向上の上でも、国際学生交流が果たす役割は、留学生と同様に大変重要であると感じています。

東京高専Sova(Sphere Tokyo)UNT

昨年度「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」として「国際通用力のある若き実践的エンジニア育成」という事業の補助金が三年間交付されることに決定し、東京高専内に「英語しか通じない空間（Sphere Tokyo）」を設置しました（Sphere TokyoはSpeak here at Tokyo Kosenをも意味しています）主な活動は以下のとおりです。

- ① Sphere Tokyoに英語のネイティブスピーカーが常駐し、授業や放課後などの時間を活用した英語によるコミュニケーション能力向上・異文化理解などの推進。
 - ② 卒業研究や企業実習などの成果を英語で発表するプレゼン研究会の実施。
 - ③ 留学生と日本人学生の日常的交流。
 - ④ 国際通用力を育成するための講演会（コロキウム）の開催。
 - ⑤ 学生企画行事（クリスマス・パーティーなどの）開催。
- 常駐のネイティブスピーカーはアメリカ人、アイルランド人の方々であり、時々フランス人の方も参加します。今までに次のような活動を行っています。
- ① 平成二十年十一月二日 第一回英語プレゼン研究会（レシテーション・スピーチ・研究発表・招待講演）
 - ② 平成二十年十二月十九日 第二回英語プレゼン研究会（招待講演）
 - ③ 平成二十一年一月二十日 第三回英語プレゼン研究会（二三組の日本人学生・留学生

による英語ポスターセッション）
④ 平成二十一年五月十九日 第一回英語コロキウム（日本国内・海外英語教育事情に関する口頭発表・招待講演）
約二〇カ国の方々が英語の授業に参加して学生と直接会話したり（International Week）、ネイティブスピーカーとのTeam Teachingを適宜行うなど英語教育に多様性が増してきています。

また高専教員が外国からの教員と英語で研究会の質疑応答あるいは共同研究をする様子を学生が直接見ることは、英語の必要性を実感させ、英語学習面で多大な影響力を持つことと確信しています。

おわりに

最近の英語教育において、英語の実用面が重視されてきていますが、海外研修などの国際交流、留学生との交流などにより、学生の意識がさらに「英語実用能力」の重要性に向いてきているように感じます。高専英語教育において「英語四技能の充実・発展」「TOEICの得点向上」などが中心になってきていますが、「国際交流」「留学生との交流」をさらに増進することにより、「受信」のみならず「送信」も充実させる英語教育がより重要になってくると思います。特に高専生はプレゼン能力を向上させる必要があり、学生のコミュニケーション能力を伸ばすための英語教育が重要であると強く感じる次第です。

参考文献

- 『高専における国際交流行事 東京高専の場合』竹田恒美（東京工業高等専門学校教授） 関東工学会教育協会高専部会特別講演会 平成十九年十二月八日
『留学生・国際交流担当教員研究集会（講演・事例発表概要集）』国立高等専門学校機構 留学生交流促進センター（沖縄工業高等専門学校）平成二十一年八月二十日、二十一日